
失恋ハイキング

新辺カコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失恋ハイキング

【NNコード】

N9255Y

【作者名】

新辺力コ

【あらすじ】

ケンカの腹いせに山に来たわたし。案の定道に迷ってしまい…。

「ああ……。困ったな

わたしは途方に暮れた。山歩きで、道に迷ってしまったのだ。

「こんなハイキングコースで迷うなんて

楽な道だと、たかを括ったのが悪かったのか、それともイラついていたのが悪かったのだろうか。とにかく少し休もうと、木陰に腰をおろす。疲労が、ドッと襲ってくる。

「とんだ休日になっちゃったなあ……疲れた……

そう、もう疲れた。肉体的にも、精神的にも。

わたしには、婚約者がいる。いや、もう『いた』と言つべきか。

木陰で涼みながら、『元』婚約者の言葉を反芻する。わたしにくれた、あたたかな甘い言葉を、ひとつひとつ。思い出すたびに、涙がこぼれた。

あんなに愛してくれていたのに、こちらも懸命に愛したのに……！

それは、ほんのひと月前の事。彼の部屋に遊びに行つたときのことだ。そこでわたしは見つけてはならないものを見つけてしまったのだ。

ベッドに落ちていた、長い髪の毛。あきらかに彼のものとは違う、細く柔らかな黒髪を。

『お前のじやないか？』なんて、白々しく嘘かれたけど、わたしは脱色しているから、髪の色は明るいブラウンだ。質感だって、傷んでパサパサ。あの柔らかな髪の毛とは、似ても似つかない。勿論、大喧嘩になつた。

彼とは、あれから一度も会つていない。何回か、電話がかかってきたけれど、全て無視した。嫌だったからだ。彼だけではなく、自

分自身の事も、たまらなく嫌だった。

彼の声を聞けば、きっと恨み言を言つてしまつ。
彼の顔を見れば取り乱してしまつ。

きっとそつなるでゐる自分を想像し、嫌悪感に震えた。
やり場のない怒りと焦燥感を鎮めるために、わたしは逃げた。仕事に、趣味に時間を費やした。
この山歩きも、そのひとつだ。

でも、まさか道に迷つてしまつなんて。

「寒くなつてきたし、困つたなあ……」

空が曇り、風が冷たくなつてきた。冷えたせいなのか体が重くて、だるい。

まるで、自分の体が自分の物でないみたいに動かせない。さらに悪いことには、

「眠い……」

激しい眠気までおそつてきた。

おかしい。今まで何回も山歩きをしてゐるけど、こんな経験はただの一度もない。急に体が動かなくなるなんて。

離れなければ。とにかくここから離れなければ。

半ば靈がかつた頭の中、動物的な本能が『逃げる』と告げていた。ここは『ヤバい』と。

逃げたい。ここから。しかし眠気が邪魔をする。

「逃げなきや……。ちくしょう、なんでこんなときにアイツの顔なんて……！」

睡魔に呑み込まれる間際、彼の顔が脳裏に浮かんだ。

「あいたい……」

そう言つたことこ少し悔しさを感じながら、わたしは意識を手離した。

(……寒い)

尋常ではない寒さを感じ、わたしは田を覚ました。
まだ頭はボーッとするが、さっきまでの体のだるさは消えている。
それにもしても、寒い。冷たい風が直接、体の中で吹き荒れているみたいだ。

「わたし、死んだのかな……？」

起き上がつて、震えながらぼんやりと広く。その間わざ語りの言葉を受けて、

『正確には、死ぬところだつたのよ』

声が聞こえた。女の子の声だ。

「誰？　どこにいるの？」

わたしは震えながら叫んだ。辺りを見回しても、誰もいない。

『あなたの中にいるわ』

声が響くたびに、体の中に風が吹き荒れる感覚が走つた。その声の主がわたしの中にいる？ 戰慄し、叫んだ。

「い、いやだ。出でつてよ！」

『あら、じつでもしないとあなた、良くないモノに憑かれるといだつたわよ』

「良くない、モノ……？」

『そ、とおつてもタチの悪い、ね。あいつらは生きた体を狙つてるの。魂が抜けたばかりの、空っぽになつたいれものを欲しがつてのから、たまに強引な事するのよ』

「嘘よ」

そんなオカルトじみた話、信じられなかつた。全力で否定したが、わたしの中にいる『もの』は別に気を悪くした風もなく、『あなた、最近やなことあつたでしょ。それか、心にずっと引っかつてる事とか』

そう、聞いてきた。

『そういう、付け入る隙がある人の魂はね、引っ剥がしやすいの。イヤなこと、悲しいこと、腹が立つたこと。そういうのをいつまでもウジウジ引きずつてる人は、簡単に憑かれるのよ。さ、私が案内するわ。山を降りるのよ』

「あなたは……なんでわたしを助けてくれたの？」

彼女は、しばらく考えているように黙つていた。

「ねえ、どうして？」

『……似てたから、ね。あなたと私』

彼女はぼそぼそと話しあ始めた。

婚約者がいたこと。その人のことがとつても好きだったこと。そして、大好きだったその人に手酷く裏切られたことを。

『汚らわしく感じたわ。あの人も、あの人を憎む私も。なにもかも……それで』

彼女は、してはならないことをした。取り返しのつかぬことを…

…。婚約者に対する当て擦りのつもりだったという。

『あの人、山が好きだったの。だから私、この山で……。ずっと昔

……』

「わたしは死のうなんて思わないわ！ そりや……彼のことは憎いけどさ……』

『嘘。憎いなんて。あなた、さつき眠つてしまつ前に言った言葉、覚えてないの』

「……それは」

『私は、あんな言葉は出なかつた。あの人の顔も、浮かばなかつたわ。……ただ、悲しかつた。さびしかつた。私が苦しんだように、

あの人も苦しめばいい。ただそれだけの思いで、一つしかない命を使つたの……。ね、あなたは……私になつちゃダメよ。まだ心に彼がいるなら、あなたはしあわせだから』

わたしは、ただ黙つて彼女の言葉を聞いていた。

『私ね、本当にあなたに取り憑くつもりだったの』

『どうして……そうしなかったの?』

簡単に出来ただろ!』。気まぐれと言ひませぬ安易すぎる。

『もう、男女のしがらみは懲り懲り』

消え入りそうな声で、彼女は言つた。

『もうじき、ふもとだわ。……日常に床つたら、ちゃんとケジメつけなくちゃダメよ』

あれは、疲れが見せた幻覚幻聴だつたのか。それとも、現実にあつたことなのか。本当にわたしの中にこの世のものではないものが入つて、世話をやいてくれたのだろうか。実際のところはわからぬ。とにかく、気がつけばわたしは最寄りのバス停にいた。今からなら、最終バスに間に合つだらう。

「アア、寒い」

夕間詰めに吹く、つめたい風に震えた。体の表面をなぐる、つめたい、本物の風。体の中から風が吹く感覺は、もうない。

「ケジメ、つけなくちゃ……ね

もう、わたしは逃げない。

『私になつちゃダメよ』

そう、言われたから。

迷惑と言われようと、これから彼の家に押し掛けてみようか。そしてこととん話し合おう。双方納得できる答えができるまで、ずっと。携帯を取り出し、かじかむ指で電話をかける。数回コールの後、驚いたような彼の声が聞こえてきた。たつたひと月聞かなかつただ

けなのに、妙に懐かしい。

「今夜、あなたの家に行つてもいい? 話したいことがあるの」

彼の声が、弾んでくる。その返事は色よいものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9255y/>

失恋ハイキング

2011年11月27日18時48分発行